

山とスキー

第四十號



札幌山とスキーの會發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便部認可
大正十三年七月三十日印刷紙本

大正十三年八月一日發行 (毎月一回)

神威嶽
©16002

1455

7513

A10637

第十四號目次

記事

詩

北海道スキー登山史

東北の山々

平地滑走に就て

山上の花園 (詩)

夏期野營に關する二三の注意

氣象學術語に就ての疑問

雪草紙

寫眞版

憩ひ

ヌタツパンペツより見たる石狩岳

加納 一郎

藤瀬 新一郎

岡村 源太郎

田口 鎮雄

六 鹿 一彦

ボースケニール

藤江 永次

藤江 永次

藤江 永次

〔一〕

〔二〕

〔一三〕

〔一五〕

〔二四〕

〔三〇〕

〔三一〕

〔三五〕

スバルテにかよわき花を
ちりばめぬ石ぞ醜き。

懸崖にアルペンローゼの

輝かぬ岩ぞ寂しき。

落日の光をあびて

夕焼けせぬ峰頭より

幸福の生の芽生えを

秘め護らぬ悲哀より

悩ましきはなし。

非霧散スル一登山史

ウエー・アルブレヒト

北海道スキー登山史

加 納 一 郎

北海道で初めてスキーが行はれたのは一九一一年二月である。それは北海道帝國大學（當時東北帝國大學）の講師ハン・ス・コラー氏が故國スウイスから持つて來られたのを學生が見て、模造品を作り、ヘークとゾダルススキーの著書を同氏に講述してもらつて、（同氏は自らはやらなかつた。）試みたのである。これはをそらく日本で初めてスキーをやつたことになるであらう。然し勿論この時は漸く歩いて歩ける位であつた様である。一九一二年冬、テオドル・フォン・レルヒ氏が高田師團の講習後、旭川師團へ來て講習をやつた。その講習を受けた札幌聯隊の將校から前記大學の人々はコーチを受けたのである。だから實際にはレルヒ系統のアルパイン式に始まつたわけで、その後軍隊の方では著しい發達は見られなかつたかわりに、大學では年々その研究を積んで行つた。そして先づ札幌地方の中等學校から漸次北海道各地に傳はつて行つたのである。

スキー登山としてはレルヒ氏が講習終了後、軍隊の人と共に羊蹄山に登山を企てたのが初めてであると考へられる。しかしその後スキー登山は殆んど大學の連中によつてされたので、近頃各地に普及する様になつてからは地元の人々がよくスキー登山をやる様であるが、まだあまり遠出はしない。加様なわけで、今日までの北海道のスキー登山と云へば、H、U、S、Vの歴史になるのであるが、幸に古い記録がある故、主として之に基き、新聞の切抜と私の舊記により個々の山岳に就て、その大體を記して見やうと思ふ。これはたゞ過去に於ける事實を記すだけであるが、私之に筆をとつたわけは、

第一に今迄の記録が單一にまとまつてゐて、比較的正確な事を回顧し得るのこゝ、今一つは、スキ一の發達に伴つて登山も追々複雑になつて行くであらうと考へて、今がかうした事柄をいまこゝめにして置く最も適當な時期であらうと思ふからであつて、特に個々の山岳に就て書くことにしたのは、技術の進歩を明かに觀察し得られるだらうと考へたからである。

羊 蹄 山 〔一八九三米〕

シリベシ、マツカリヌブリの事で蝦夷富士と呼ばれてゐる。函館本線ツナグ倶知安附近からその平原に聳立する全容を仰ぎ得るので北海道の山のうちでは最も有名である。相當高いにもかゝはらず、近づき易いので、初期のスキー登山の中心となつてゐる山である。

前にも記した通りレルヒ氏はその講習をすませてから、一九一一年三月之に登山を試みた。一隊は師團の講習を受けた人々で、十數人であつた。頂上まで行つたと云ふ事であるが、多くの凍傷者を出した事や、その後、参加者の口吻によつて此の事は信じられない。倶知安方面より、今も雙らぬ夏道を登つた事と思はれる。

一九一三年一月二日H・U・S・Vの八名が登山を試みた。その時は午前三時に倶知安より馬橋で山麓の登山會事務所に到り、八時三〇分同所を出て夏道と略同様のコースを取つて一時三〇分に四合目に着いてゐる。同所で食事をして午後二時三五分六合目迄行つたが、大吹雪の爲に中止し下山した。下山の際一名コースを間違へて眞狩の方へ降つたので一行が無事に麓の事務所に落ちつたのは夜に入つてからであつた。此の時は参加者は皆スキーの講習を受けて一年にしかならず、登山と云つては手稻ミ藻岩の他、經驗がなかつたのであるから、たゞへ準備に落度はなかつたとは云へ、その技術から云つて成功しなかつたのは無理もない。

一九一七年三月二五日、H・U・S・Vの六名が大體同じ道を登つてゐる。既に手稻や毛無方面で數回の登山を経験した當時一流のランナア揃ひであつたので、割合に情況もよく六合目までスキーで行つたのであるが、その右山の急斜面で雪が硬くなつたため（六合目まで森林帯）一人が滑落したので、終にスキーを脱ぎスタイグ・アイゼンに更え、それから眞直に硬雪上を頂上へ辿りついた。

一九一九年二月九日H・U・S・Vの八名が比羅布に泊つて、やはり同様の道を試みた。此の時はベルグリー・アイゼン

を用意して、スキーで登り得る限り行くと云ふ前提であつたが、九合目の平の少し下で、硬雪と堅雪とは到底スキーの綾付を許さぬ様になつたので降つた。

一九二〇年一月三日及四日、メモバーには多少の差があるが、山麓の登山會事務所に泊つて前同様の登山を試みたが三日は八合目附近で大吹雪に遇ひ下山、四日再び登山を試みて初めて、頂上に達した。雪がスキーの綾付を拒まなかつたのが、幸であつたのだ。

一九二三年一月二日、比羅布に泊つて前同様の登山を試みたが、八合目邊で濃霧の爲め引返すことになつた。

以上最近までの登山の経過であるが、之を一括して見るにその登路は殆んど同じく夏路を踏襲し、たゞ六合目以上裸地では雪質によつて多少異つてゐる様である。前夜の泊地は種々であるが、山麓事務所が何と云つても最も近い。倶知安から馬橋を用ひたとは云へ、此處から一日は夏の日永でも少々苦しいのである。元來羊蹄山の登路は一九二三年七月初めて眞狩別方面に開かれた他は一に此の倶知安道に依るの他なかつたのである。羊蹄山のスキー登山に於ける問題はスキーミ克蘭ボンのコンビナチオンもさることながら、スキーを出来るだけ用ひ様と云ふ爲に、その時期を最も深く考慮せられた様である。以上の記録にも十二月より三月までの各月試みられてゐるが、今更云ふまでもなく、十二月はあまりに雪が深すぎ、三月はまた雪質の硬化著しく、一月又は二月を撰ばねばならない事が解る。だが初めてスキー登山を試みられてから一〇年、第五回目に漸くその頂にスキーを運び得たと云ふのも、以上の觀察の他に、晝間時間と寒氣との問題が時期の判定に離るべからざる關係を持つてゐるので、此等の方面の影響を受けたのであらうと思ふ。勿論時期の他に、當日及び兩三日前の天候如何によつて著しい相違があることも考へなければならぬ。又その十年間に於ける技術と經驗の推移をも考慮すべきである。何しろ羊蹄山は深雪地の平原に在る火山であるから、その中腹以上の雪質の變化の著しいことは想像に餘り在ることである。彼はその嚴冬の姿をスキーに許したけれども、尙その崇巖の形と、放射狀の谷を埋める白銀の雪とを以て、容易には峯を許さぬ、強い力を表現してゐる。

イワチヌブリ

〔一一五四米〕

一九一九年羊蹄山を試みて後、倶知安より岩雄嶺山に到りそこに三泊の後二月一三日早朝同所出發、迂回して南面より

火口原まで達したが、その最高點たる火口壁上には到らなかつた。

一九二三年三月 青山温泉より登攀を試み同じく火口原にまで行つてゐる。

登路は火口壁が破れて火口原が直ちに斜面に移つてゐる西南面よりする他ない。充分の時間を費すならば、その峯頂に達すること困難ではないが、常に此の山を試むるときは、行程に支配せられて、必ずしもその究頂を目的としないので、登頂の記録は少いが、一九二三年三月二四日、青山より登山し、翌二四年三月にも峯頂に登り元山に達してゐる。

ニセコアンヌブリ
〔一三〇八・五米〕

一九一九年二月一三日イワツヌブリを降つて後、此の山をその東北斜面より企てたが八合目邊で、雪質硬化しスキートの範圍を超えたので思ひ切り、ニセコアンベツの方へ降つた。

此の山はその後、青山温泉にH、U、S、Vが合宿する様になつてから、殆んど毎年練習の爲に登られてゐる。

一九二一年一二月の合宿中に一回登山を試みてゐる。此はニセコアンベツより同山の東南尾根を辿つたものであるが頂上へは達しなかつた。

一九二二年一二月の合宿には二六、二九、三〇日の三回登山を試みた。いづれも前記のコースを執つたので、その三〇日には頂上に達してゐる。頂上の近くでは、尾根が甚だ狭い爲にスキーを脱したが、雪はさう硬くなかつた様である。

一九二二年三月〇、S、〇の人々が青山温泉より登り狩太方面に下つたが成功を収めなかつた。

一九二三年三月の合宿に於て再び登頂を企てゐる。

登路としては出發點を青山温泉に置くが最も便利で、そこからなれば東南尾根に向つてその廣い斜面にデウグザツグを彫むといふ。頂上は大きな雪庇を生じてゐることある故、注意するを要する。また斜面は四合目附近まで白樺、雑木の粗林であるが、それより上は全く裸出地故、雪質の變化も亦著しい。最初の時の東北斜面よりのコースよりは急ではない。青山温泉より倶知安に到る峠が初めて越されたのは一九一九の二月であることは一寸前にも記載したが、此のコースはその後、再三行はれ或は青山よりニセコとイワツの間の鞍部を通つて倶知安に出たり、岩雄礦山に達してワイズベルヒに到る場合に、どうしても通らなければならぬ所である。新山精練所の上流に於てニセコアンベツを渡るのであるが、その附近に温泉が出てゐるので、雪が融いみきにはずつみ上の方を廻らなければならぬ。

チセヌプリ〔一二三四・五米〕

一九一九年二月三〇日 青山温泉を起點とし、馬場温泉を経て登山を企てたが成らず。

一九二一年二月の合宿に初めて、十数名がその頂を極め、翌一九二二年の一月には二九・三〇の兩日いづれも十数名で登つてゐる。翌二三年の三月にも亦二回の登行を行つた。

柔かい圓錐形の山で頂上近くは可なり急であるが、比較的登り易いのと、いつも天候が良好であつたため、あまり失敗の記録はない。

メクンナイ岳〔一二〇二・六米〕

一九二三年三月二五日の合宿に初めて達した。翌二四年三月二三日再び此の山を極めて後雷電岳方面に滑走したものが數名ある。この附近のスロープも良雪の際には、青温泉附近の最も痛快な滑走地の一つである。

イソナイ岳〔一〇八五・七米〕

一九二三年三月二五日 青山合宿の歸途メクンナイ岳を経て登山、岩内方面に滑降した。相當長いスロープが岩内の方に續いてゐる。

雷 電 岳〔一二二二米〕

一九二四年一月 新見温泉よりメクンナイ岳を経て此の頂に達した。

昆 布 岳〔一〇四五・一米〕

一九二一年一月 昆布市街より國道に沿ひ名與川二十六戸附近の小學校に泊り四日頂上を極めた。上下とも七四四・〇米の三角標を經由したのである。

ムイネシリ岳〔一四六〇・五米〕

一九二一年一月七日 豊羽礦山に泊り長尾山を経て頂上に達したのを初めとし、翌二二年一月にはキモベツ岳より縦走一九二三年四月余市岳方面より登りたることあり。一九二四年二月一日元山より長尾山を経て、同年四月一二日黒橋よりキモベツ岳を経て登れるものあり。



藤江永次 慰ひ

キモベツ岳 [一一七六・九米]

一九二〇年二月一〇日 中山峠よりキモベツ岳に達せり。一九二二年一月郡馬團體より登山を試みムイネシリを越え定山溪に出た。一九二三年一二月末、再び同方面より登山し、薄別澤に下れり。二四年三月には中山峠合宿中之に登り、四月黒橋より中山峠を経て登れるあり。中山驛遞所より一日行程として、甚だ樂なり。

中山峠 [八三六・三米]

定山溪より俱知安に通ずる主要道路であつて、此の頂に驛遞屋舎あり、冬期宿場(無人)の便ある故、一九一八年二月以來札幌近郊のスキー地として最も良好なりとせらるゝものである。當驛遞屋舎を根據として滑走を樂むもの多く、一九二〇年二月、一九二二年三月、二三年三月、二四年三月、四月いづれも三、四日より一週間に渡り滞在せるものあり。

余市岳 [一四八八・一米]

一九二二年二月一〇日 盤ノ澤より九八九・五米、一一一八米を経て頂上に達し、朝里岳を経て同地に下山せるを初めとする。

一九二二年四月〇、S、Cの人々が盤ノ澤より登り阿女罽岳に縦走せりと。

一九二三年一月五日 同じく盤ノ澤より登攀を試みたが、大吹雪の爲め失敗、四月盤ノ澤より頂上に達し、定山溪に達した。白井岳方面よりソンメルスキーにて登山せるものあり。二四年三月二五日再び盤ノ澤方面より登山し、一三〇〇米鞍部まで達せり。

毛無山 [六五四米]

一九一七年二月一日 小樽丸山より七三五・三米〔後に遠藤山と云ふ。〕を経て初めて登り蘭島方面に滑降す。同月一九日同じコースを登り、二五日小樽伍助澤より登り、いづれも鹽谷方面に降る。

一九一八年一月二七日 小樽奥澤よりオコバチ山〔六二二米〕を経て鹽谷及び丸山方面に分れ降る。二月二四日、三月二一日登山。

一九一九年二月 小樽伍助澤より登り蘭島に降る。

一九一九年二月 蘭島より登る。

一九二二年二月一日 伍助澤より登り蘭島に下る。

一九二二年二月二十九日 遠藤博士追悼登山。小樽オコバチ山より登り蘭島に降る。

一九二三年一月四日 小樽オコバチ山より登り、蘭島に降る。

其他此の山はO、S、C等にて兩三回登山をなせり。元來遠藤博士歸朝後スキー地として優良なること認められ、盛んに登山せられたるも、コース大旨裸地なるを以て雪質の變化著しく、その良好なるときは愉快なる滑走をなし得るも時に甚だ不快なることあり、又一部分は近年その殖林生長の結果、困難の斜面を生じたる等により、近來あまり登られず。

手 稻 岳 [一〇三・七米]

一九二三年二月一日 琴似驛より馬橋にて發寒に到り永峯澤の左方を登る。當時夏道また此の方面よりせり。下山路また同じ。

一九二四年より一九二六年まで記録不明なるも、此の間二、三回同様コースより登山せるものゝ如し。

一九一七年一月二一日 琴似より平地滑走にて發寒に到り頂上に達せり。同月二七日 琴似より馬橋により發寒に到り頂上に達せり。同年三月二五日 發寒より登り初めて輕川方面に下る。途中にてネオバラダイスと稱せる良滑走地發見。

一九一八年一月 二〇日、三一日、二月一七日、三月一七日、二四日登る。

一九一九年一月五日、一二日、一九日、二月一一日、一六日

一九二〇年一月二日、二月一日、八日、一〇日

一九二一年一月五日、一七日、二三日、二月六日、一二日

一九二二年一月三日、二二日、二月五日

一九二三年一月五日、二月一日、一二日、二五日、三月五日

一九二四年一月二日、六日、二〇日、二月三日、三月一二日

以上登山の記録あれども、尙此の他多數の登山あり。冬期間殆んど毎日曜登山者たゆることなき有様なれば、その詳細盡し難し。一九一八年以後は全て輕川より四〇六米高地を経て雁皮平より登り、ネオバラダイスを経て降るもの多く、近年發寒川方面より登山せるものなし。

奥手 稻岳 〔九四九・二米〕

一九一九年一月二六日 錢函より登りたるを初めす。そのときは更に九九四米の頂を経て阿部山に到り、發寒川に降り琴似迄平地滑走をなせり。

一九二〇年一月初め、奥手稻より手稻に縦走せり。一月一八日錢函より登る。この時は更に八三八・七米の三角點に到り九〇六・九米の遙山を経て和宇臼山より錢函十方坪に下れり。同年二月二九日前同様のコースを取りて登れり。

一九二二年一月七日 一七日 二月二一―一三日 一八―二〇日いづれも登山を企てたるも錢函川上流の伐木小舎に泊したるのみにて下山せるものもあり。遙山方面に廻れるものなし。

一九二二年一月一五日 奥手稻より手稻に降る。二一日より二二日にかけて、伐木小舎に泊り奥手稻より迷澤山に出で、上平澤より小樽内川に出で定山溪に達せり。四月一六日登る。

一九二三年一月一〇日 一四日、二一日登山を試み、一四日のみ頂上に達す。其他は天候及び時間の都合にて引返せり
一九二四年一月二〇日 二月一〇日登る。二月一〇日遙山に回れり。尙他の一隊は遙山の麓、礦山事務所跡の伐木小舎に泊りて、翌日定山溪に出でたり。

白 井 岳 〔二三〇一・六米〕

一九二三年四月 ムイネシリ方面よりゾンメルスキーにて登る。

百 松 澤 山 〔二〇三八・一米〕

一九一九三月 發寒川、常次澤より登り、定山溪に出ず。

一九二一年二月二七日 同様登山、定山溪に出ず。

一九二三年二月一五日 定山溪より烏帽子岳を経て登山。琴似に降る。

一九二四年二月三日 發寒より入り、同コースを歸る。二四日發寒より登山烏帽子岳〔一一〇九・七米〕を経て定山溪に出ず。

札 幌 岳 〔二二九三・八米〕

一九二二年二月 登山を試みられたが、降雨の爲め中止。翌一九二三年二月一五日 盤ノ澤より登山、冷水澤を定山溪

に降る。同年四月二日空沼岳方面より登山。

空 沼 岳 〔一二六一米〕

一九二三年三月二〇日 眞駒内上流湯澤より登山。此の時は更に狭薄岳〔一二九六・一米〕に回り下山せり。同年四月二日再び登山、札幌岳、漁岳の二方面に下れり。

一九二四年二月二日湯澤方面より登山。同年三月

漁 岳 〔一二二八米〕

一九二三年四月二日 空沼岳より登り、同方面に返れるものと、更に支笏湖畔に出でたるものあり。

シヨカンベツ岳 〔二四九一・四米〕

クンベツ岳 〔一三七六・三米〕

一九二三年五月二三日 増毛より武好驛を経て、濱益御殿クンベツ岳を経て暑寒別岳に登る。ゾンメルスキーを用ふ。

一九二四年五月二三日 同様ゾンメルスキーを以て登山。

サオロ岳 〔一〇五九・六米〕

一九二二年一月二二―二三日 登山頂上を究めたり。

アシユベツ岳 〔一七二六・九米〕

夕張山脈中の一峯で、鉢盛山と共に岩石に富む山岳として著名なるもの、然も山部驛より一日にして往復の便あるを以て、再三登山せられたるも頂を極めたるもの二回にすぎず。

一九二〇年三月二九日 山部原野一九線よりユウフレ澤を登り、夫婦岩の西南方に達したるも、峯頂との間に大なるギャップありしを以て登頂不能。此の時はスキーは、ノール、プ、レ澤口に棄て、スタイグアイゼンを用ひたり。

一九二一年四月三日 山部二十五線より一〇八八米の三角點を経て頂上に達す。峯頭附近に於てはスタイグアイゼンを用ひたり。

一九二二年三月二四日 同様登山を試みたるも金具破損の爲め引返せり。

一九二三年二月二五日 同様登山せるも失敗せり。

一九二四年三月二日及二十二日同様廿五線より登山せるも一〇八八米附近にて引返せり。同年四月六日第二回の登頂を見るに到れり。此の時も亦頂上附近はスタイグアイゼンを使用せり。

十 勝 岳 [二八七米]

一九二〇年三月二七日 十勝岳麓平山鑛山事務所に泊り、その頂上に達したるも、スキーを用ひず。

一九二三年一月二九、三〇兩日 中腹の中川温泉に泊り登行を試みたが、天候不良のため下山。

一九二四年一月二六日 同様温泉に泊りスキーを以て頂上に達した。

旭 岳 [二五五米]

一九二一年三月二八、二九、三〇の三日間、ユコマベツ造材小屋を根據とし、引續き登山を試みたるも天候不良のためユコマベツ水源に達したるのみにて下山す。

一九二二年一月八日及び九日 同様造材小屋に宿泊の上、ユコマベツを溯り九日午後一時頂上に達す。峯頂附近に於てはスタイグアイゼンを使用せり。同日美瑛忠別に下る。爾後未だ登山の企なし。

黒 岳 [一九八四米]

一九二二年三月三〇日 層雲別温泉より登山。峯頂附近はスタイグアイゼンを使用せり。

石 狩 岳

一九二四年五月中旬 松山温泉方面よりクワウンナイに出でヌタフヤムベツを下り、石狩澤を登れるも、天候不良の爲め頂上に達せず。ゴムメルスキー使用。

以上各山岳に就て登山の大略を記して見た。特に記すものゝ他は全てH、U、S、Vの部員によつて行はれたものである。尙各山岳のスキー初登山の表を作りて見ると次の通りである。但しこれは皆スキーで完全に頂に達したと云ふ意味ではなく、一部スキーを使用して成功したものを示したのである。〔スキー登山の定義に就ては、本誌第一三號、大島君譯マ―セル・クルツ氏の所説参照〕

山名	標高(米)	初めて登山を試みる年月	初登山年月	備考
手稲山	1103.7	一九三二	一九三二	
毛無山	654.0	一九二七	一九二七	發寒より永峰澤を登る
羊蹄山	1893.0	一九二二	一九二二	
奥手稲山	949.2	一九二九	一九二九	
百松澤山	1036.1	一九二九	一九二九	
キモベツ岳	1176.9	一九三〇	一九三〇	
十勝岳	1045.1	一九三〇	一九三〇	
昆布岳	1045.1	一九三〇	一九三〇	
ムイネシリ岳	1460.5	一九三二	一九三二	
余市岳	1481.1	一九三二	一九三二	
朝里岳	1280.8	一九三二	一九三二	
アシユベツ岳	1726.9	一九三〇	一九三二	
チセヌプリ岳	145.5	一九二二	一九二二	山頂附近はスタイ クアイゼンを用ふ
旭岳	1033.8	一九三二	一九三二	
榎前山	1005.6	一九三二	一九三二	
サホロ岳	1005.7	一九三二	一九三二	
迷澤山	1005.7	一九三二	一九三二	
黒岳	1984.0	一九三二	一九三二	
阿女鱒岳	1044.4	一九三二	一九三二	
ニセコアンヌプリ	1308.5	一九三二	一九三二	
西ノブカウシ山	1256.0	一九三二	一九三二	
札幌岳	1293.8	一九三二	一九三二	
烏帽子岳	1109.7	一九二九	一九三二	
イワチヌプリ	1154.0	一九二九	一九三二	
メクンナイ岳	1102.6	一九三二	一九三二	
イワナイ岳	1085.7	一九三二	一九三二	
空沼岳	1261.0	一九三二	一九三二	
狭薄岳	1296.0	一九三二	一九三二	
漁岳	1318.0	一九三二	一九三二	
小漁山	1235.2	一九三二	一九三二	
白井岳	1310.6	一九三二	一九三二	
シヨカンベツ岳	1491.4	一九三二	一九三二	
クンベツ岳	1376.3	一九三二	一九三二	
雷電岳	1211.0	一九三二	一九三二	
石狩岳	—	一九三二	一九三二	

東北の山

藤瀬新一郎

アルピニストにしるスキーランナーにしろ、それが晴れた日ならば尙更のこ吹雪の日でも、雪に被れた山の頂に立つたときの感じは一生涯忘れられないものである。若しその山頂なり尾根なりが積雪期登山の記録の未だないものならば尙更思出深いものとなるであらう。以下東北に於て私の知つて居る範圍（それは極めて狭いから若しも誤りがあるかも知れぬがそのときは御教示の程を切に願ふ）で未だ積雪期に於てのスキー登山の記録のないものを例擧して私及私の友の経験したその山々の附近の状況を併せ記して有能なスキーランナー、アルピニストの興味深い紀行の紙上出る日の一日も早く來るのを待つて居る。

鳥海山（二千二百餘米、地圖、吹浦、鳥海山）東北一の高山で最後の村からの登高距離約二千米に近くても困難な山と思はれる。それに登路も南側からしても相當分り難い、併し四月から五月にかけては可成り愉快な登山が出來ると思はれる、五月の初め麓から望んだときは未だ一面の雪だつた、案内人は冬は駄目、春も危いものだと思ふ。

月山（一九七九米、田麥俣、月山）これも鳥海と同様に麓の村からの距離が長く、若し彌陀ヶ原で吹雪かれたらそれこそ大變だ、相當調べて後行くべき山だと思ふ。

藏王山御嶽と刈田岳の縦走（白石上の山）夏はヤブがひどくて中途で一泊を必要とするが積雪期はどんなもの？地圖のみでは降りかけてから迷ふ處がある。御前岳から嫌先温泉迄。刈田岳から遠刈田迄の滑走は實に愉快だ、雪は三月一杯である、御

前、刈田の間の尾根はもつと長くある。案内人は遠刈田にあるが仲々行つて呉れぬ。

大朝日岳（一八七〇米、荒砥、朝日嶽）昨年十一月末スキーを持たずに行つて見たが朝日鑛泉から三百米も登ると雪が續いて居た、天候が悪くて朝日神社迄しか行かなかつた。鮎貝から朝日鑛泉迄は五―六時間を要するから積雪期はもつとかかると思ふ、それは山腹を通る夏路は積雪期は雪崩の處があるので此山から頭殿山への尾根を通る必要がある。朝日鑛泉の人も雪のあるときは尾根を通ると云つて居た。それ故、鮎貝の先の黒鷲が日蔭を早朝出れば一日で達せられる。朝日鑛泉から大朝日迄は登路を撰べば非常な困難なくして行けると思ふ。朝日鑛泉は冬も人が居る。併し嚴冬あの大朝日の尖頂に立つことは鳥海の頂に立つと同様東北に於ける最も困難なそして價値多

きものと思はれる。春の硬雪期には大朝日から西朝日（一八一三米）大鳥池迄樂に行けるとのこゝである。

朝日鑛泉古川屋の主人はいゝ案内で春には是非来い云つて居つたが期を得なかつたのを残念に思ふ。積雪期は吾妻山より長い。

吾妻山群（吾妻山、福島、米澤）

吾妻山に就ては既に登高行第三年、山とスキー第二年八〇頁に出て居るが未だ試みられなくて興味ありと考へられるものは、白布高湯から西吾妻（二〇二四米）西大嶺に登り小野川に下る路である（登高行第四年にその逆を歩かれた記録あり）降路さへうまく取れば樂だが、この邊の尾根は幅が廣くて霧や吹雪に襲はれると全く方向を失する。私共も一昨年十月末に東大嶺の頂附近で随分迷つた。白布高湯には案内が居る。次には吾妻の製練所から東大嶺へ登る路これは製練所から家形山烏帽子山を

通る尾根傳いと、谷地ノ平に下つて再び登る路とがある。私共は嘗て十月末この尾根を通つて東大嶺に出て雨に遭ひ吾妻温泉に降つたが、三日露營した、それはヤブの非常にヒドイ爲めである、併し雪の状況さへよければ割に樂であらう。吾妻温泉の下りは一吋ニ難しくて充分地形を知つた者でなければ出来ない。

谷地ノ平に下つて直接東大嶺に登つてもよし、又中吾妻から東大嶺への尾根に登りそれを傳つてもよい、昨年春製練所から中吾妻に登るのに谷地ノ平で大藏川に出るのは一寸と迷つたがそれでも四時間餘でゆつくり中吾妻に登ることが出来た。中吾妻の頂上から見た處では其所から東大嶺への尾根は樂らしく見えた。五色温泉から製練所に行き（又は微温湯が信夫高湯から）それから東大嶺を経て吾妻温泉に行き、それから白布高湯に行き小野川に下るか、又吾

妻温泉から東大嶺に登り谷地ノ平に下り一寸と登つてから愉快な滑走をして製練所に達し、更に製練所附近を滑つてもよし、直ちに五色沼を経てあの壯快な滑降を樂んで信夫高湯に出る経路は吾好山での最も愉快な又手筈のあるものでは無からうか？高湯への降りには地形を知らねば不可能である。信夫高湯にはスキーの出来る案内が居る。

岩手富士（二一〇米？）一昨年二月友が行つたが天候が悪くて頂上の一角に達して直ちに引き返へし三角點を極めなかつた、雪質は思つたより悪く八合目からは岩石が出てスキーを脱して登つた。

思ひ出したまゝ書いたので粗漏の點を深く恥ぢる。尚以上の山も積雪期に行かれる前に一應夏でも地形を見て置かれる必要があると思ふ。殊に鳥海、月山、大朝日は。（終）

（仙臺にて認む）

平地滑走に就いて

岡村源太郎

平地滑走と云へば、あらゆる平地行進法が抱含せらるゝ事になる。躍進滑走、三段滑走は勿論の事、スケート式滑走、復杖の推進力のみ依る滑走法も平地滑走と考へられる。然しこゝに云ふ平地滑走は極く狭義のものと考へて、主として普通行進法とでも稱すべきものに就いて述べる考へである。

平地滑走の要領は大體二つの動作で示される。

- 一、直立より一スキーを雪面より離さず、膝を軽く伸ばしたまゝスキーを滑らしつゝ踏み出す。之を踏出しといふ。
- 二、直ちに後足にあつた体重を前足に移し、同時に踏み出した勢を利用して且前膝を屈しつゝ前スキーを前に滑らす。之を滑出しといふ。

平地滑走はこの踏出し、滑出しを反覆すればよいと云ふも、如何にも簡單であるが實はそうでない。初心者はこの要領を呑み込む爲に少からず苦心すると共に、熟練者でもこの動作の裡に含まれて居る注意點を忘れて居る人が少くない。數あるスキー術著書中にも、種々の有効なるヒントをスキー走者に與へようと努めて居るのが見える。然し何故にそのヒント即ち注意が必要であるかは、余り説かれて居ない。單に經驗的に知得した事を、それを初心者に了解せしめんとして居るに過ぎない。そして時に依つては、自分がやつて居る正しい動作と全く反對の事を教へて居る時さへもあるのである。それでは決してスキーランナーも充分の納得を以てその練習に當る事も出來ず、又新しい滑走法に對しても之を己が物と

なすには非常に無益の勞力を費さねばならぬ事となる。熟練者はよくその間の原理を呑み込んで、初心者の指導に又よりよき滑走法の研究に力を盡すべきであらう。殊に之は今後のスキー登山を爲す人及びスキーのデイスタンスレースに力を致さんとする人に取つては、最も有意義の事である。

一、踏出し(シュテプ) (突張り)

スキーを用ひぬ歩行では、一足を地上に接してその足の伸張に依つて最も大きな身体の前進力を得る。之と同様に平地滑走の時にも、踏出しの際の体重を支持する時の運動が、最も大なる前進の要素となるのである。この運動より得た前進力が前スキーの滑出しを促すのである。然しこの踏出しの時に後足の突張る運動はスキーの後滑りを來す事が非常に多い。殊に塗蠟の充分なスキーを穿いた時は殆ど例外無しに後滑りがする。この後滑りは如何にして起るか云ふに、之は全然スキーの靜摩擦係數と後スキーに加へられた突張りに依つて生ずる水平分力ミに關係するのである。

即ち、突張る力の水平分力がその時のスキーの最大摩擦力よりも小さい時は、後滑りを爲す事は決して無い。反對に水平分力がより大なる時には、スキー走者が杖等の助けを借らざる限り必ず後滑りを生ずる。(第一圖)然らばこの摩擦力或は水平分力は幾何の力で與へられて居るであらうかといふと、之は非常に複雑な條件に依つて常に變化しつゝあるのである。今スキーに加へられた突張りの壓力が一定なるものと見ても、その水平分力或は摩擦力はその壓力の作用線の後スキーに對する角度に依つて變化する。即ち足の力とスキーに接する雪面との角が小なれば小なる程水平分力が大きくなるのである。(第一圖)第二圖BよりCの場合には明かに水平分力が大きい。従つてCの場合にはBよりも一層大きな水平前進力を得て、その分力の反作用としスキー走者の体は前に進み得る事となる。

この時摩擦力はこの分力の増加と共に増加するけれども、之は一定度の最大摩擦力以上には増加しない。それで足の加へた方向が次第に水平に近くなつて、水平分力が極めて大きくなり、遂にその分力がスキーと雪との最大摩擦力以上になると、後スキーは後滑りを起すのである。即ちスキーランナーは或程度まで体重を後足に掛けて突張る事は必要であるが最大摩擦力以上の分力を生ずる時ミなつたら、直ちに後足スキーより力を抜かねばならない。然らざれば無用のエネルギーを費す事になる。

更に理論的に考へて、スキーと雪との摩擦係数が常に同状態に支配せられて一定のものであると假定すれば、スキーが最大摩擦力以上の水平分力に依つて後滑りを生ずる限界角は全くスキーの静摩擦係數に依つて決する。加へられた突張りの力の大小に對してはその限界角は常に無關係である。即ち良く滑るスキーを穿いた時は、その限界角は大きくなければならぬが、後足の突張りの力は如何に大きくても、決して限界角は大きくなる必要はない。前進の最大要素たるべき、踏出しの時期に於ける後足の突張り（強く後足を伸す事）は同一のスキーを穿いた時には、スキーとの或限界角以上を成す方向に加へられてはいけないといふ事になる。（以上はスキーの重量をネグレクトして證明し得る事である）

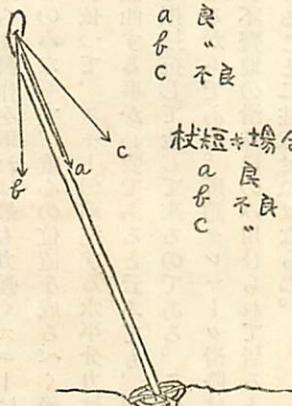
之等の原理より誘導せられる踏み出しの際の注意は色々のスキー術書に示されてある。「後足を踏張らずに踏み出した前足に急に体重を掛けよ」「長に過ぎ短に過ぎる歩行を爲すべからず、或は「完全に後足より体重を抜き踏出しの幅を少しく小にすべし」等の助言は全て、踏み出しの際に滑出しに移る時期を失すべからず、又早過ぎざるべき事を示したものである。即ち有効的な後足の推進は、後足に加へられた力の方向がスキーと或限界角を爲すに至るまでは充分に力強く行ひ、その限界角に達するや否や後滑りを起さぬ以前に直ちに滑出しに移つて、後足より力即ち体重を全然抜くべき事を意味して居るのである。全然力を抜くに至らずとも、後足で斜後方に突張る事は此の時には絶対に中止せねばならない。

二、滑り出し（グライテン）

踏出しの時期に靜かに前進して居つた前足は、前述の如く足の力を抜くや否や直ちに全体重を負擔する事になる。そして前足は体重を擔ひつゝ強く屈曲せられ、同時にスキーは滑出すのである。この滑出しの原動力とも云ふべきものは、（杖を使用せざるものとす）踏出しの時の水平分力に對する反作用である。即ちスキー走者はその反動で前スキーの滑出しを行ふのである。そして全体重を擔ふた前スキーが滑出す動作に伴つて、後スキーは力を失つたまゝ、自然に前滑出を行ふ事になる。この時に注意すべき事は、踏出しに於て得たエネルギー即ち前進せんとする力を成るべく有効に使用すべき事さ、滑出しを爲すに當つては最も大なる役を務むる前脚の勢力を少からしむる事である。

第一の力を有効に用ふべき事即ち前スキーの前進分力が最も大ならんが爲には、体の重心を極度に低下せしめればよい斜前方に加へられた力は重心より（杖を使用せざる時）作用するものと考へられる。又加へられる力の作用線とスキーの

Fig. 5.



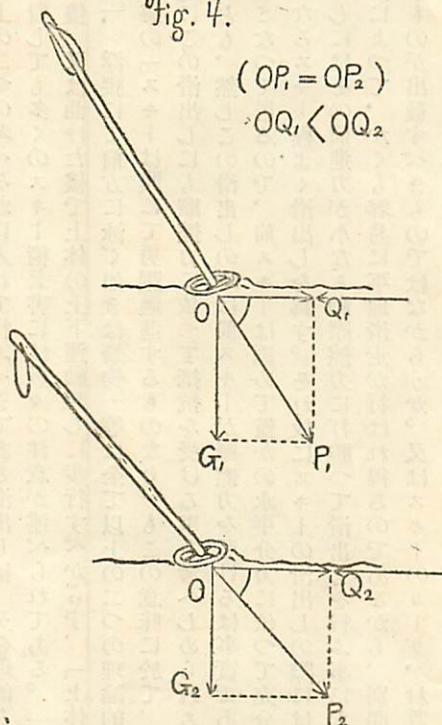
杖長*場合

- a 良
- b " 良
- c 不良

杖短*場合

- a 良
- b 不良
- c "

Fig. 4.



$$(OP_1 = OP_2)$$

$$OQ_1 < OQ_2$$

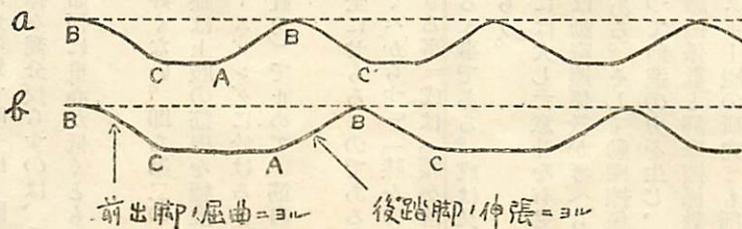
Fig. 6.

普通歩行 = 於て重心移動



平地滑走の際

- a 杖ヲ用ヒズ
- b 復杖使用



前出脚、屈曲 = コル

後踏脚、伸張 = コル

爲す角は成るべく小なるがよい。従つて重心と足底とを結ぶ線が滑りつゝあるスキーと最も小さな角を爲す時、即ち膝を強く屈し上体を取らず動作を取れば最も力強くスキーは前に滑出する。(第二圖)又この時の上体を幾分反らすのは、重心を低下せしむるのみならず、重心の位置を成るべく後方ならしむる事が重要なるが爲である。如何に重心が低くとも、その前後の位置に依つて、スキーの前進する水平分力は甚だ變化し易いものである。(第二圖)

然し膝を深く屈曲する事が必要であると云ふても、程度を越えて甚しく体を低下せしむるのは好くない。即ち第二の注意が第一に對して相拮抗して生じて來るのである。この理由は實に明白な事實であつて、深い屈膝は上肢の筋肉を極度に勞せしむる事になるからである。所謂テレマーク滑降は安定な姿勢ではあるが、實際には單にジャムピングに於けるランディング或は短い不齊地の滑降にのみ用ひられて居ると同様の理である。適當の角度(一般には直角)で止めて、筋肉の過重をより少くすることに注意せねばならぬ。

以上の二つの考へを頭に入れて行ふべきである滑出しは、又合理的な踏出しに依つて初めて完全にせらるゝのである。之に對しても多くのスキー術著書には數々の注意が述べられてある。「上体を余り前方に傾け過ぐべからず」「膝を伸ばした儘、又は曲けた儘で上体の上下運動無しに歩行すべからず」「上体を一步毎に前方に屈曲せざる事」或は「腰を落付けよ」、浮腰にて前方に泳ぐ如きは禁物」等は全て以上の二つの理論的見地より容易に察し得らるゝ事である。或は又堀内中將の「スキーは腹にて勇躍邁進するものなり」もこの意味に於て、充分味ふべきヒントであらう。

更にこの滑出しにも摩擦力に依つて抵抗を受ける事を考へしめられるのである。之は練習の上には大した意味を有せぬけれども、然しこの滑出しの時は前スキーが摩擦力を受けるは事實である。然し幸ひにもこの時は動摩擦係数が考へらるべきとなつて居るので、前スキーは極めて僅かの水平分力に依つて充分に滑出しを續け得るのである。そして動摩擦係数が小なるスキー程よく滑出しを爲す。それ故にスキーの滑出しの際には、大きな靜摩擦係数に依つて前進の力を生じ、滑り出しにはその前進力が小なる動摩擦係数に打勝つて滑出しを行ふ事になることも云ひ得る。即ち動摩擦係数と靜摩擦係数の相異によつて、かくも容易に平地滑走が行はれ得るのであるから、別問題ではあるが此處よりもスキー蠟の研究も稱すべきものが出發すべきものではなからうか。又はスキーのカーブ、材質等もこの點を考へたならば、一層好いものが出來るのでないか考へるのである。

以上の踏出し、滑出しといふ事に對して一寸御断りしたいのは、この二動作は兩スキー運動を一所にして時期の上から分けたのではない。一脚の踏み出し（シテムメン）の時期に既に他脚は滑りつゝある事、或は兩スキーが同時に滑りつゝある時期も必ずある。單に一脚に就いてのみ考へて、脚の運動は突張り（体の支持も含む）と滑出しの連續に過ぎぬ事と異なるのである。（第三圖）

三、杖の使用

以上は杖を使用せぬ場（のみに就いて考へらるゝのであるが、こゝに復杖を使用するに幾分その状態は變化するとして杖の利用法は實に輕視し得ぬ重大さを持つて居る。杖の使用は、各々單杖の場合、復杖の場合、單杖一本を保持する場合等と述べるのは避けて、一般的に最もよく用ひられ、その利用に絶對的價値を求め得べき復杖に於いてのみ考へることとする。

先に述べた踏出し及び滑出しで、復杖使用に依つて變化される部分は、踏出しが比較的弱くとも相當の体の前進力を得て、その爲めに滑出しの距離が非常に長くなる事である。

之等は皆杖の前進力即ち腕の力が助けとなる爲である。この時は、前滑出スキーの反對側の杖が雪面を突いて体を前進せしめるのである。即ち後足の側に杖が突かれて、後足の突張りによる前進分力とこの杖の爲に生ずる前進分力とが一所になつて一層大きな前進力な体に與へる事となる。又この杖を突いた時の杖の下端に於ける杖の固定度は非常に大きい。雪質に依つて色々變る事であらうが、余程杖が傾いてもスキーの突張りの時のやうに後に滑る事は稀である。否普通の平地行進では絶對にない。（第四圖）そして杖に加へられた力が一定であるとしたならば成るべく杖は低く傾いた方が、より大なる前進力を得る事となり、又その有効なる一突は一層長い歩幅を與へてくれる。然し之は一面よりは異常に大なる腕の力を要することとなり、競走以外の時には、極く自然的に杖を突くに止めるのが最も得策である。勿論杖の有利な使用方法は常に頭の中に入つて居て、軽く與へる腕の力を最も經濟的に働かしめねばならぬ。

競走に於ては杖の使用法の良否は、直接ランナーのタイムに現はれて來るものであつて、絶對にその注意を怠つてはならぬ。殊に登りよりは寧ろ、平地に於ての方が、杖の使用が重大なる意味を有するのである。杖は元來腕で推す事は事實

であるが、腕のみで推進するとは決して云はれない。廣く肩及び背の筋肉の活動が重要な部分を占め、更に腹部、側腹部の筋が下肢の運動とよく一致して働かねばならぬ。單に腕のみを動かして推進せんとする場合と、上体の運動をも加へて行ふ場合とに、スキーの滑出度の決して少からざる事に氣が付くであらう。我々がよく滑走とか云ふて居るものも、唯杖の活用を極度に大ならしめんとする手段として、可成大きな上体の運動を加へたに過ぎない。

又上肢の筋肉殊に伸節は非常に弱いものであつて直きに疲勞し易い。之を避けて比較的腕の負擔を少からしめ、而も杖を充分に或許さるゝ範圍まで傾ける間は最も力強く推進力を得る爲に、競走の時には上体が深く屈曲せらるゝ方法が取られて居る。即ち三段滑走はこの點に於て最も有効な滑走法と云ふ事が出來て、杖の使用と脚の歩む方に別種の方法が用ひられて居る。即ち初め二歩は杖を振り上げたまゝを駈出し、第三步目を踏み出すと共に兩杖を同時に使用して後足の踏張りを極めて容易ならしめ、体の前進力を極度に大ならしめんとして居る。要するに三段滑走に於ける、何時に兩杖を突いて体を推し出す事と、体の前屈に依り腕の勞力の簡單に輕減せらるゝ事は、可成の有効な結果を齎すものを見て差支あるまい。

結局杖の使用は腕の力を有効に働かしめるやうにせねばならぬ。そして競走の時のやうにより大きな杖の力を要する時には、杖は腕のみならず全身で推すのである事を忘れてはいけぬ。又この杖使用に就いては、杖を握るといふ點に無用の勞力を除く爲には、杖の紐も余程注意して取付けられなければならない。猶杖の使用法に就いては幾多の興味ある問題があつて、平地滑走を殊にレースの際の滑走には絶對に重要な事である。

登山の時等には、大きな上体の運動は成るべく避けねばならぬのであるから、ごく緩やかに腕のみを働かす積りでよい然し前述の事項の中で注意すべき事も必ずあると思ふ。更にこゝに一寸氣の付いた事は、杖は(殊に杖の短い場合)斜後ろに突く時は、その突く手の動く方向が成るべく杖の傾きと一致しなければならぬことである。(第五圖)

四、終りに

先に述べた踏出し、滑出しといふ點から、その時のスキー走者の重心の移動を考へて見るのも面白いと思ふ。重心の畫くカーブは嚴格に云へば、その時間と高さとの關係、水平運動の距離と高さの關係は多少異なる所もあらうが、大体スキー



スタツヤンベツより見たる石狩岳

藤江永次

走者の前進速度が常に一定と假定したならば略同一のカーヴになるものと見てよい。(第六圖) A Bは一脚の踏出し即ち伸張に依つて体の重心が上昇且つ前進するのを示して居る。B Cは即ち他脚の踏出しに於て、その脚が強く屈曲せられ、その爲に重心が低下するのである。C Aは低い重心のまゝ兩スキーが滑りつゝある時期であつて、杖を巧みに使用し又踏しが有効に行はれて居れば一層長くなり得る所である。緩やかな登行はこのA Cが極めて短くなつた平地滑走を考へる事が出来る。

さて終りに一言したいのは、私は踏出しの前進力といふ事に就いて可成の言を費したが、之は既に相當熟練したランナーに對する言である事を御断りしたい。それは先に述べた限界角とかいふものの概念は、到底初心者には了解得する事が出来ない。この言葉のみを考へたなら、反つて初心者の最初の平地行進練習をより困難ならしめるかもしれないからである。それで初めのコーチの時には、踏出しの注意としては先づ重心の上下の甚しくなるべき事に止めてよいと思ふ。そして其他の細い事に就いては、そのランナーの技術の傾向に依つてそれ／＼異つたヒントを與へてやればよい。

私の小さな歡察と、平常心掛けて居る事の二三を概括して書いた積りであります。考へ違ひや了解せられにくい所もあるかとも思ひます。異論が御座いましたら御遠慮なく御發表を願ひます。

(二四・六・二六)

御記憶下さい

本會より發する電信は發信人氏名を左記の通り省略致します故、御了知下さい。

『ヤ マ』

夏期野營に關する二三の注意

田 口 鎮 雄

登山と云つてもその日歸りの出来る山は知らず地理、天候、その他目的の如何に依つては山小屋の設備でもない限りどうしても野營は登山の附帶條件でなければならぬ。だから一度でも山に行つた人なら意識しない迄も如何に野營すべきかは百も御承知の筈である。今更書き立てる事でもないが今迄一度も野營をした事のない人及び常に人夫をつれてのみ登山した人が一字でもこの中から参考になるものを拾つて呉れたら嬉しい。

一概に野營と云つても非常に範圍が廣すぎる。季節、地理、天候、登山目的、天幕の有無、人數、健康狀態等によつてまち／＼である。とても一々それ等に付いては書き切れもしない又經驗もないから茲には夏期野營に就いて貧弱な經驗から二三思付いた事を書き並べさして下さい。

野營地としては第一に水と燃料とを得らるゝ地を選ばねばならぬ。水は野營に必隨する炊事に缺く可からざるものであるし又一日の汗を落すことの出来るのも水に俟たねばならぬ。火は炊事に燠をとる上に必要なものであるし又火は山に寝る人間に不思議に凡ての不安の念を抱かせない。水は良質のものを選び燃料は可燃性の大なるものを選ばねばならぬことは勿論であるが水は肉眼の判斷と味覺の習慣に訴へたものなら大した間違もない様だ。燃料は夜を徹して焚く丈の量を得ることが必要であらう。良く燃へる木は偃松、イタヤ、ナラ、ハンノキ、シナノキ等である。生の白樺は評判程は燃へない様だが然し一度燃へついたら仲々消えないし表皮は成程焚付にいゝものである。焚付としては乾燥した表皮のはけた様な

細い木片、生の木のみの時は木質部を小さく削つたのや新聞紙等も役に立つものであつて殊に降雨の時の焚火は困難である。北海道や奥秩父地方なら熊笹の黄色く枯れた莖を焚付に推賞し度い。笹は濡れてもほんの表面のみで決して内部迄至らないからそれを鉋の背か何かで潰して蠟燭にでも火を移してそれで付ければ良く燃へるものである。焚付を直径一尺程も集めてその上に乾燥した細いものから順に濕つた太いものとあまり間隙を作らない様に平行に積み上げる可きであつて火鉢の炭火の様に放射形に置くのは初めの燃へが悪い。平行形に焚かれたものならば物干竿式の馬でも組んでそれに鍋なり飯盆なりを一時に澤山掛けられる上にも便利なものだ。免に角多量の焚付を一時に用ひ若しも降雨中ならばそれ丈餘分の焚付を用ひて火を庇ひながら電信柱位の太い木に火を付けてしまふ事だ。

色々な條件から推して行くと野營地は水に近い森林中に選ぶのが理想的らしい、又良く乾燥した地を選び度い。周圍を木で囲まれた日當りのいい地があれば理想的だが大体のところ南面か東面の所を選ばいゝつもりである。青草の軟かさうに生えてゐる所につれられてうっかり野營するゝ濕地であつて返つて不愉快で健康をそこねる様なことも出来て来るから大体、下生を見て判断し度い。大きな木の枝の下に天幕を張るのも晴天の時ならいいが長く雨が續くと枝から滴が天幕の一枚所にポツ／＼落ちられるといくらピンと張つた天幕でも漏つて来て不愉快なものだ。よく乾燥した森林中の空地に白い天幕でも張つて大きな火を焚き泉でも近かつたら御座敷とあまり大差あるまい。

然し實際の場合そう理想的の場所もないものだ。コースの上や天候の都合上多くは何等かの不便は覺悟しなければならぬ。二三の場合を擧げてみ度い。

河原に寝るのも又いゝものである。流木が澤山あるので薪や焚付に不自由なく、水は用ひ放題で時々しては水浴も出来るし釣も出来て思はぬ營養物にありつけて、廣々として氣持のいい事は、實にこたへられない。御互に注意し度いのは雨が来て増水し易いことで、夜中に天幕の引越をする様な喜劇はよくあるものだ。流木のある點は實に有難い。私達の様な御人形の山男には焚木を集めるのは時間丈でも大したもの、到底本職の工夫や山男の半分的能力もない。表皮のはけた木なら水につかつてゐて表面がヌル／＼する様な奴でも良く燃へる。河原に寝る時ベツトをうまく作る必要で寝てゐる横腹の邊にゴリ／＼石でも當る様だと一晚中安眠出来ないし、又翌日中体の節々が痛い。河原は時々天幕の杭がうまく打込めなくて困る場合があるが、大きな石や大きな流木でも曳きづつて来て結びつけるのも又一法であらう。天幕は常に

ピンと張るべきであつて、少し新らしい天張でも防水をあまり依頼するのは誤の様に思ふ。河原もあまり流れに近い所は夜明近くなつて来るに猛烈に寒くなるものだ、又残雪の近くに寝る時も同様である。

傾斜の大なるにつれて仲々いゝ空地は得られなくなつて来る。水を得やうとして少し澤に下りてみると、そこは狭い場所であつて到底天幕を張る平地がないとすると、かゝる場合には大々的に地ならしをやることである。一度第一圖にある様な傾斜して下に大きな、一寸動かせられぬ様な石がゴロゴロある所に寝た事があつたが、その時圖の様にその傾斜に直角の線に杭を四五本打ち、そこから上の方に石とか木をやたらに積み上げて水平になる様に三角形の部分埋めてその上に熊笹を一尺近くも積み上げた。丁度その夜から雨になつて翌日一日降り通したが水は却つて下を巧みに流れて天幕の中には少しも浸水せず、終日平氣で晝寝をして滞在したことがあつた。

又よく縦走などをしてゐる場合、谷に下りずに残雪の傍に野營しやうと思ふ折に、吹暴しの場所では工合が悪いので松の下によく穴なりに凹んだ平地があるので上部の偃松の枝を切開いてそこに天幕を張るこゝもある。

然し周圍の狀況等で天幕を張れない場合にも随分出會ふことがある。大きな岩の下の洞穴状の空地はそう云ふ時にかなり有難い野營地を與へて呉れる。地ならしをして置いて中で火を焚くと中の蟲類を追ひ出すし又濕氣がなくなる。火を今度穴の前に遷して焚けばかなり暖い野營が出来る。又偃松の下の穴に寝て上に天幕を結び付けて蓋して置く場合もあらうし、ハラ／＼する様な場所で天幕を体に巻きつけて体を岩や木に結びつけたりして寝なければならぬこともあらう。然し之等は一時的であつて數日數夜の野營としてはとても堪えきれなく、風や雨のひまひまの來ると逃げ出したくなる。晴天の時は火を焚いてその周圍に大の字に毛布でも蓋つてひつくりかへつてゐても一夜は平氣で過ごせる。晴天又天幕を全然携帯しない時には何か簡單な屋根を作らなければならぬ。

A 半穴小屋 (Half-cave shelter)

B 倒れ木小屋 (Fallen tree shelter)

C 單斜小屋 (Lean-to)

D 三脚小屋 (Tripod or Straddle-bug shelter)

等の小屋は比較的短時間に出來るから便利であるし又、プリミティブな感じがたまらない。

Fig. 1.

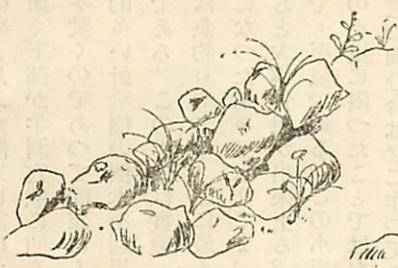


Fig. 2.

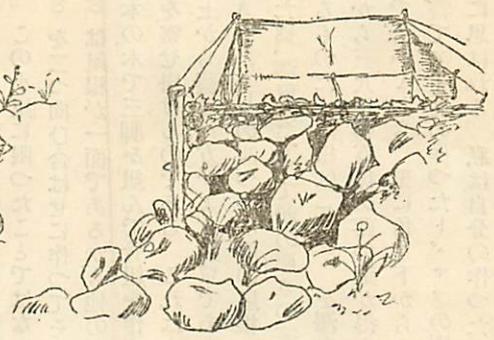


Fig. A.



Fig. B.



Fig C.

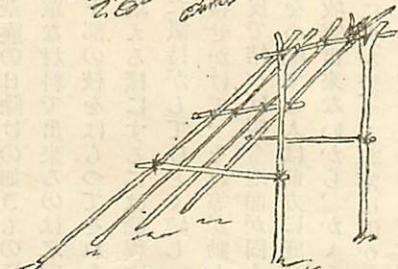
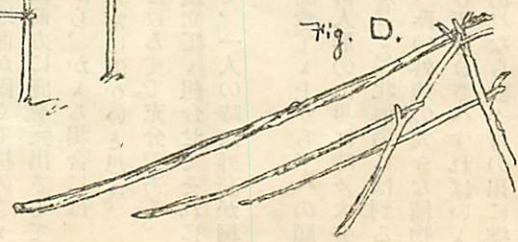


Fig. D.



今御存じの事と思ふが簡單に説明する。

Aは圖の如く下部が半洞穴狀に凹んだ岩を利用して前方より棒を立掛けて茶店の葦簾の日除けの如きものに葺き上げてその間に火を焚くのであつて簡單にして要を得たものである。最も短時間に最も簡單な材料で出来るのは之であらう。Bは枝の比較的多い針葉樹の倒木を利用して兩側に屋根形に二平面を残す様に上部と下部の枝をはらつてそれを屋根に逆に立掛けるのである。この小屋は實驗したことがないからよくは知らないが雨によく堪える様にするには餘程困難な仕事であらう。Cは魚釣りやアイヌ達に最も實用されてゐる種類で又最も小屋を作つて寝た氣持がしてひどく嬉しいものであるこれは三股になつた木を二本立て、それに横に梁を渡して、その梁に數本の椽を寄せかけて、それ等が動かぬ様に横木を數本入れると大体骨組が出来上る。接合點は木の股を利用して、木が紐が木の皮で結べば假令地面が固くて杭のさゝらない場合でも平氣である。この小屋は前方が開放されてゐるので雨でも吹込むのを心配する人は前方に庇を突出さしてもいい。この小屋に限つたことではないが、かゝる簡單な小屋では多人數はさても收容出来ないから、かゝる場合には *Teando* を二つ向ひ合はせに作つてその間隔を人の出入出来る範圍にしてその間に火を焚くと非常に温かいと思ふ。*Teando* は屋根が一面であるから他の形のものより非常に簡單であつて側面に當る二つは枝を立掛ける丈で充分である。Dは三本の木で三脚を組んで骨組を作るもので内一本を長い木を用ひ、短い木を二本垂直に近い迄立て、組合せてそれに長い木を寄せ掛けるのである。これは中の面積が材料の割に小さいから少人數の時に便利であつて、一人の時外蓋が桐油紙を上から蓋せた方がより簡單である。

以上 A B C D の四つの小屋の屋根は必ず下から上に葺かなければならぬ。雨の中で働き乍ら周章で、上から下への順に葺いた爲、濡鼠となつて頭の悪さの笑話を残した事がある。何でもない事でも注意してやらぬと御人形の山男は時々大失敗をやるものだ。屋根は *Frame* を澤山入れたら、その上は葉の大きな植物で葺くのが最も手間が省ける。北海道には到る所二尺から三尺位の直径の蔦の葉が得られるから、この點は大いに恵まれてゐると云はねばならぬ。蔦の外葉の大きな植物なら何でもいゝから、兎に角、下から上にうんと葺いて押へこして上から又たてに *Frame* を掛けて置きさへすればいい。自分は嘗てアイヌの作つたト、マツの樹皮で葺いた *Bark Teando* を見たが實によく出来てゐた。あれなら數ヶ月の用に堪える様に思はれる。私は自分の作つた小屋に幾夜も續けて寝たことがないから、かゝる小屋の壽命は知らないが、本物の

山男などに聞くに、露の葉で葺いた小屋は晴天續きの折でも焚火で屋根が萎れたり腐敗したりするので三日に一度は葺換へを要する相である。雨でも降るなら、のべつに葺換へをする必要があらう。

小屋以外としては風雨の通さぬ毛皮等の *Zeepin-ten* を用ふるのもいゝと思ふが未だやつてみた事がない。

野營地を選んだらベッドを作らねばならぬ。地面より高く土を盛るなり、周圍に溝を掘るのも降雨に際して浸水を防ぐ事が出来る。そしてその上に乾燥した物を可成厚く敷く。例へば偃松、蝦夷松、ト、松、樺、笹、その他潤葉樹の小枝を六七寸敷いて又その上に軟かい草の葉を敷けば理想的である。北海道では又この點で露の葉も便利である。ベッドを作る時アザミの葉が混つてゐて酷い目に會つた事があるが、馬鹿の二の舞を踏まぬ様注意して貰ひ度い。凡てベッドに用ふる材料は一度よく振るなり、又一寸火に當てるなりする必要があるらう。それは水氣を掃ふ上にもいゝ事だし、又葉に附着してゐる蟲類を一所に天幕の中に持らこむ事を防ぎ得るからである。ベッドは少しの凹凸でも直してから寝ないで翌日迄体の節々が痛い。そのベッドの上には桐油紙、防水布、或は毛布なりを敷いて寝ないと濕氣の爲に唯さへ疲れ易い野營に餘計疲勞を覺える。

衣服は夜は平地でも寒くなるし、殊に高地にあつては晝夜寒暖の差異が甚しい。毛のシャツ二枚にスエーター位はどうしても缺かされないが、殊に腰から下は寒さを感じるものであるから、ズボン下はそのつもりで暖いものを携帯する。寒くて仕方のない時、着てゐるシャツを一枚ぬいで腰に巻き付けると眠れる事もある。毛布があれば非常にいゝが種々の事情であまり多くを持たないのが普通であるから、焚火でも盛んに焚いて我慢する氣も必要と思ふ。私は厚い日本紙で作つてそれに澁でも塗つた *Woolen-hair* を推賞し度い。これは目方も軽く、容積も小さくなるし、濕氣や蟲類を防ぎ、且つ毛布に匹敵する丈の暖かさがある。毛布も持つて行くなら袋狀に縫つてゆくに非常な暖かさが異なるものである。寝てゐる間の蚊除けは寒紗をかぶるのもいゝ。天幕の中に蠟燭を一本立てると思ひの外暖いものだ。

色々の事を並べたてたが、凡て變化極りない山地にあつてはそう理想的な野營は出来るものでない。天候の如何やその日の行程の難易によつて、大体地圖の上に野營地は豫定して置き、前以て樂な處を選ぶ可きで、非常な困難な登山か、特別の目的の登山でなければ變な場所には寝ない様にし度い。開放しの自然の中に晝夜共にふんぞり返るのであるから、思はぬ所から思はぬアクシデントが起るので兎に角、野營には周到な注意があつて欲しい。暴風雨で天幕を吹飛ばされたら

食料が不足を告げるのに天候の爲に數日滞在したり、又天幕を焚火で焦して大穴を明けたり、鍋を落して底に穴を明けたりする事迄も豫知出来ない事である。然し一度考へて野營始めてからは、四圍の變化に容易に動じてはならぬ事は勿論である。一日位なら雨に濡れながら寝ても氣が張つてゐれば何ともない位の覺悟も又必要の事と思ふ。日が暮れても天幕を張る場所がないと云つて人夫に八つ當りする人達は御人形の山男以下である。

野營地を捜し始めてからは餘り慾を出さずに、此處なら寝れば寝られぬ事もないと云ふ位の條件の下に満足す可きではなからうか。

(終り)

山上の花園

ギユスターヴ・ボオヅエル

萬年雪の起伏のはげしい、眩ゆひ海の上から、
わづかに露はれてゐる黒い岩のあひだで、
絶え間のない争闘をつゞけて、
自分の境界をこんな高きにもても擴げやうとて、
花は光明をめあてとして、

夏の黎明の熱情の脈動するやうな、

氣高い花園を荒寥のなかからつくりあげた。

純潔な、そうして強健な高嶺花！

死といつても顔をあはせて、

あのおほきな峰さへも乗りさうさしてか、

お前は、嵐が蜂々のうへへて、その虚無の歌をうたつて
ゐる時でも、

光りのなかに喜び勇んでゐる！

氣象學術語に就いての疑問

六 鹿 一 彦

スキーランナー程天候の事を氣遣ふ者は船乗を除いては恐らくあるまい。些細な温度や風で忽ち御機嫌を損じる氣儘娘の様な雪を相手の仕事だから、雲の去來の一々や風の吹き廻しの強弱方位に一喜一憂する様は寧ろ滑稽な位である。しかし時にはそれが生命懸の場合もある。生か死か、その運命の鍵は北空を隈彩る黒雲に在り急涯を照らす日光に在り、よく其れを洞察し得る者のみが、死に面接してしかも其れから逃れ得る場合には、一片の雲、一度の温氣ミ雖、重大な意義を有するのである。だから享樂を完全にする爲にも、又生命の貴重さを體驗してしかもその安全を期する爲にも、スキーランナーは總べて氣象學上の智識と經驗とを持たねばならぬ。

處で、何れの學問でも同様だが、學術語と云ふものはそれに慣れない者には極めて難解なものであり、時には俗語と意義を異にし或は全然正反對な場合も往々にしてある。氣象學に於ても此の例に洩れず、我々が平常使つて居る言葉は氣象學上に於ては全く別な事物を意味して居る事が二三あつて、その爲に氣象上の智識が正確でない場合には、事實が混同し錯雜する恐がある。スキーに關係あるもので著しく思はれるのは「吹雪」と「樹氷」とである。

一般に「吹雪」と稱して居るものは降雪時強風を伴ふ場合であつて、今更説明を要しない程萬人衆知の現象である。然るに氣象學上の吹雪は、我々の云ふ吹雪とは全然別のものである。中央氣象臺刊行の氣象觀測法に依れば「吹雪は地上に降り積つた雪の風に吹かれて空中に舞ふものを云ふ」と定められてあつて、一般に云ふ吹雪とは全く異つたものである。

之に依れば所謂吹雪の時も、地上に降り積つた雪が風の爲空中に舞ふから、吹雪と稱し得るが、天氣晴朗で寒氣凜烈、シマツた雪が靴の底でギウ／＼と鳴る絶好のスキー日和に於ても、少し風さへ出れば吹雪なる譯である。だから此の事を了解しておらぬと、氣象報告の吹雪日数を見て會得が行かぬ事になる。一般に云ふ吹雪が起るのには、雪が降る事と、風の強い事とが要件であつて、雪の質は粉雪であらふと軟雪であらふと乃至は霰であつたとて差支はない。霰混りの吹雪と云ふ場合もあるのだから。今此の二要件に就いて北海道各地に於ける觀測の結果を示すと次の様である。

降雪日數

	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月
函館	一〇・三	二二・二	二五・四	二二・六	一九・六	三・三
札幌	一四・八	二四・二	二六・四	二二・九	二二・一	六・一
旭川	一八・二	二七・〇	二六・八	二二・〇	一一・〇	八・五
網走	一一・四	一九・三	二一・三	二〇・二	一九・一	八・四

烈風日數

	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月
函館	五・六	七・二	五・九	四・九	五・九	五・〇
札幌	三・四	三・七	四・〇	三・八	五・八	七・〇
旭川	〇・二	〇・七	〇・三	〇・二	〇・三	〇・四
網走	二・二	三・〇	二・五	二・〇	二・一	二・四

以上の觀測から推論すれば、札幌、函館が最吹雪が多く、網走は次位で旭川が最少いこ云ふ結果になる譯である。然るに實際の吹雪日数を見れば此の推測に反して次の様な結果になる。

吹雪日數

	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月
函館	〇	二・七	三・一	二・三	一・九	〇
札幌	一・二	六・〇	九・一	八・四	六・〇	〇・四
旭川	〇・六	三・三	三・六	二・五	三・四	〇・一
網走	〇	一・四	二・五	二・二	一・五	〇

これは吹雪を云ふ意義を地上の雪が風に吹かれて舞ふものと解すれば易く理解されるのであつて、軟雪地に近い函館は風は強く吹くが飛散する粉雪の日が少い爲であり、粉雪地の旭川では極少しの風でも易く飛散する粉雪の日が多いのに依る爲である。従つて氣象學上の吹雪日數と降雪日數との間には全然ではないが因果關係は無いものと見て差支はない。だから吹雪日數が多い土地だから、とてもスキーに行つても面白くは滑れまいと考へるのは早計である。寧ろ其の土地が粉雪の多い良好なスキー地を解釋す可きなのである。

然らば所謂吹雪は氣象學術語では何と云ふか云へば「風雪」と稱するのである。此の名稱に就いては外國でも問題が起り、遂に千八百八十五年に巴里で開催した萬國氣象會議では英佛獨三語を以て次の様に術語を定めたのである。

吹雪 Drifting snow. Chasse-neige. Schneereiben.

風雪 Snow storm. tourmente de neige. Schneegestörher.

然し、吹雪、風雪と云ふのは日本に於て勝手に譯したのであつて、しかもそれが從來一般に使用されて居た言語と反對になつて居る。風の爲に地上の雪が空中に飛ぶのを「風雪」と稱した方が、合理的で且従前の使用語と混同しなくてよい徒らに局外者に對して難解な字句を用ふるのは下らぬ虚榮心である。況んや之は日本一國に於て勝手に作つた譯字である以上當然改正すべきである。

次は樹氷に就いてである。

樹氷は雪國でも可成り氣温の低い土地でないと見られぬ現象であるが、北海道か又は可成りの山岳地方では相當に知られて居るものであつて、決して珍らしいものではない。此れは氣温が極めて低下してしかも靜穩無風な夜に、空氣中の水

蒸氣が冷却した地物へ昇華作用に依つて氷結したものである。謂はば霜の大袈裟なものと思はへば間違はないので、地上に裸出した有らゆる物が眞白く飾られるのである。此の物の最美觀を呈するのは小枝の密な潤葉樹を飾つた時で、特に山上の樺林に於ては美の極致に至るものである。赤褐色の樹膚は包み隠した樹氷を透して照り映ゆる朝日に薇薔色に燃え立ち、輝き渡る日光をキラ／＼と四方に射返へして、世にありとあらゆる寶玉を一時に懸け連ねたかの様に燦き渡る。スキランナーの喜悅は無限大に達する樹氷の語を聞いたのみでもう有頂天になつてしまふ。然るに此の樹氷と云ふ語も氣象學者は我々の手から奪ひ取つてしまふのである。そして此の使ひ慣れた懐しい語の代りに「木花」と云ふ全く縁も由縁もない術語を差しつける。そして「樹氷」を他の現象の方へ與へてしまつて居る。他の現象云ふのは高山上に於て屢々經驗するものであるが、樹木其の他露出した物へ雲霧が吹きつけられ、風の來た方向へ附着した粗鬆な白色の水である。前者に一見類似して居るが、此れは一面にのみ發達して前者は全面に發達して居る。又前者よりは餘程粗鬆であつて一寸以上の層を作つて居る。此の兩者は一九〇五年 G. M. Penken 氏に依つて命名され、前者は *Ranhref*、後者は *Ranhrost* とされた。そして其の譯語として採用されたのが、*Ranhref* に對しては「木花」*Ranhrost* に對しては「花ボロ」又は「樹氷」である。そして此の兩者の總稱として霧氷なる語が與へられて居る。しかし從來我々は此の *Ranhref* を樹氷と呼び慣れて來て居る。*Ranhrost* は冬の山へ登る特殊の人間にのみ知られて居るもので、未だ名稱は確定して居ない。

私の考としては、前者即ち *Ranhref* には依然として「樹氷」を用ひ、後者即ち *Ranhrost* には、「霧氷」を用ひ度いのである。此の兩者は外見類似して居るが、發生の原因が異り、發生の場所も違つて居るのだから、之を無理に總括するのは統一慾に心の迷つた學者の誤りだと思ふ。樹氷は依然として樹氷でよい。雲霧の去來する爲に生じた *Ranhref* には霧氷が適當である。*Ranhref* は霧とは何の關係もないのである。「木花」「花ボロ」と云ふより「樹氷」「霧氷」の方が名稱の統一の上から云つて適當である。統一は此んな處で實行するがよい。そして此の兩者の總稱は別に作るに及ぶまい。

以上一寸諸兄の御參考に迄愚考を述べた。此點に就き御高説を伺ふ事が出来れば、幸甚である。

雪 草 紙

ボースケニーゲル

◇

札幌のスキランナーの巢窟であるところの圓山の、その天然原生保存林の冬枯れの枝に、たむろしてゐるおびたゞしい鳥のうちの一羽が、その斜面で遊んでゐる人間のスキランナーを、兎や角いつたことがあつた。これらの鳥は雪がとけると皆鍊場へ飛んで行くのに、その一羽の奴は、陽氣の加減で南國の方を飛び廻つて、漸く梅雨時にまた古巢へ歸つて來た。有難いこゝにその一羽がボースケニーゲルの評判をくわえて來た。「甚だよろしくないさ。」誠に御尤も千萬な事である。

草紙が雪でも、持つ筆が曲つてゐるせいか、折角の平等、純白もどこへやら甚だよからぬ愚文をならべたてると云ふ。洵に恥ぢ入つた次第で

あるが、幸に持ち方が逆であつたせいか、所謂曲筆阿世には踏みこまぬ筈。

お叱りを蒙つたとは云へ、今更ら持ちかえることも出來ず、またくのさばり出る氣になつた。陽氣のせいではないが。

◇

「……貯藏室には十五俵の白米が絶えず補給せられ、木炭六千三百貫は、有峰と此處とに分割して置かれ白砂糖五十貫、人夫用の「お粥」約一石、その他此れに準じた食糧の備へ付がある。殊に下座敷を見せて貰つたときに驚いたのは、數段の美しい棚の上に、幾種さも知れない大小の罐詰類が、列を正して犇々と詰め合つてゐたことである。大阪の小さな食糧品店などでは、到底あれに及ばない。

『熊の粕漬です。明日は一つこれで焼肉を拵へて差し上げませうか。』

芳烈な快い香りが、うつとりとする程、濃やかに迫つた。

『やあ、珍品々々。……結構ですな。』

『西洋料理の材料も、一と通りは揃へて御座いますから、何んなら御自由に、あれをお使ひ下さいませうやう。』

『怎うか御勝手に……』

有る／＼。『こいつは素敵だ』怎う獨りで想つた。

酒類ではセリーもポルトも、ウ井スキーは勿論のこと、マラガ、リキユール、カナリー、アデーイーラ……』

『おい、一体何を讀んでるんだい。』

『これかい。これは龍宮のお話さ。龍宮が海から抜け出て、山の中に、しかも深雪に埋められて出現したと云ふわけだ。』そこを訪れた人の話。詳しくは最近の『山岳』に在り矣。

◇

『考へてごらんさい。日本の山

と云ふ山は、人間が初めてその頂を踏むときには、みんな清浄な藁でこしらへた、ワラジと云ふものをはいてゐたんですよ。今時の様に、そんなにむつかしい、何ぞかナイゲルとか云ふものゝ生えてゐる、馬の皮や牛の皮で出来たものは、はいては居りませんでした。やれ岩登りだ、やれ冬季登山だとか、やかましい事を云つては、やたらに大きな背負袋に腰をふらつかしながら、汗みどろになつて、それでも衝氣一天張で山へ行こうなんて抑も大間違。お山は菅笠に糸立、金剛杖に草鞋か五、六足もあれば大低のまころは歩けるもんです。それに……』

彼はこゝで残りの番茶を飲み干して、唾を一つした。

『今は何でも彼でも學問にしてしまふ。合理的登山だ。研究的旅行だ』と云ふ。そんな七むづかしいことはどうでもいい。山は知らん顔して涼

しい北風に、息を入れ、早く雪でも来んかと思つとる。若いものが大勢山へはいるせい、近頃は女までが尻端折つて乗り出して來ては、あすこの澤は渡りづらいの、まこの尾根はどうへづつたらいゝのなんて、心得顔をする。全く以て不埒な話であることだ。』

『然しおぢさん。それあ無理ですよ。大低の山は登りつくされる。毎年毎年澤山な人がをしよせる。それで山は開けて女も來れば、小兒も登る。ある所では足駄で歩ける様になる。そうなると一方、人を嫌ふ山好きは、こそゝと峽や、低い山の岩壁にまがりつく様になる。そこへ持つて來て、向ふからはやたらに珍奇な道具が這入つて來る。たまに一つ位買はなければ、山好きで通つた估券にもかゝはると思へば、買った揚句は一篇使つて見たさに、觸太鼓をたゝいて大それた企てもやる……』

『口先きや、氣まぐれはよしだがいゝ。衝氣で行くから山は荒れるのだ。山へ行くのは自然に還ることで自然に還ることは、原人になる事だ。岩にのほりたけりあ、裸になつて、へばりつけばいゝ。金ばかり掛けてろくな事はせん。』

おぢさんはこゝ云つて、長い煙管を、鳴らし乍ら喫つた。彼の頭には立山、白立、御岳の峰々が、盛夏の涼風に送らるゝ六根清淨の、神々しい聲に包まれてゐる姿が描かれてゐる。

草鞋と靴。それは山人ならぬボースケには、今更解らぬ問題である。



雪草紙も、筆蹟消えぬならば屑籠へ。妄言の恐ろしさに偽物のボースケナイゲルは初吹雪を俟たで昇天と致さう

山岳界消息

□去る六月二十日東大スキー山岳部主催にて活動寫真會あり。フィルムは名古屋の伊藤氏の所有でロッククラ イミング(四卷)空より見たる歐洲アルプス(五卷)多數參會者ありたる由。

□本年、日本北アルプス劔澤三田平に「劔小屋」なる登山小屋富山縣廳にて建造せり。劔岳登山に便なる由。

□日本アルプス登山要項(信濃山岳會發行)登山計劃その他に關する照會所及び登山口、小屋諸物價の精細を記す。同方面登山者に便なり。

各大學夏期計畫

早大 山岳部

- 第一隊 上高地キャンピング
- 第二隊 五色ヶ原キャンピング

東大スキー山岳部

- 第三隊 常念山脈縱走
- 第四隊 常念山脈より笠岳へ
- 第五隊 牧より常念岳笠岳へ
- 第六隊 穂高、槍縱走
- 第七隊 槍ヶ岳より烏帽子岳へ
- 第八隊 針の木越、劔岳、藥師岳へ
- 第九隊 劔岳より藥師岳へ
- 第十隊 藥師より槍ヶ岳へ
- 第十一隊 劔岳生活
- 第十二隊 劔岳より鹿島槍へ
- 第十三隊 白峰三山縱走
- 第十四隊 甲斐駒岳より鋸岳へ
- 第十五隊 赤石山脈縱走
- 第十六隊 日光より尾瀬へ

- 第一班 朝日岳方面
- 第二班 月山方面
- 第三班 飯豊山方面
- 第四班 奥日光方面
- 第五班 燒山火打方面
- 第六班 燕、槍方面

- 第七班 後立山脈方面
- 第八班 立山附近
- 第九班 甲斐駒、白根三山、鳳凰山塊方面

法政大學スキー山岳部

- 第一班 常念山脈、槍、燒岳
- 第二班 白馬山
- 第三班 白馬連山、黒部川
- 第四班 針ノ越え、立山
- 第五班 針ノ木越え、立山、劔岳、黒部川
- 第六班 槍、烏帽子岳縦走
- 第七班 穂高、槍、烏帽子岳
- 第八班 後立山縦走
- 第九班 黒部川、下廊下 下り
- 第十班 乗鞍岳
- 第十一班 白峰山脈
- 第十二班 甲斐駒ヶ岳、地藏岳縦走

第二高等學校山岳部

- 第一班 白馬方面
- 第二班 常念槍ヶ岳縦走
- 第三班 烏帽子槍ヶ岳

- 第四班 針木越立山縦走
- 第五班 白峰仙丈岳方面
- 第六班 烏海月山方面
- 第七班 阿寒岳方面
- 第八班 大雪山方面
- 第九班 赤石、悪澤岳



第六回研究会 六月十八日

來會者 阿部、加納、赤松、長谷川、田中、廣田、大久保、中野、小森、佐々木、伊藤、田口、高杉、岡村、須藤、藤江、宮澤、小川、(十八名)

研究事項

- 露營地の選定について (田口)
- 冬期寫眞撮影について (長谷川)
- 北海道スキー登山史 (加納)

豫科旅行部夏期計畫發表

第七回研究会 六月二十五日

來會者 緒方、廣田、寺田、赤松、牧野、岡村、本田

松川、中野、加納、藤江、岩森、田口、佐々木、
阿部、伊藤、
(十七名)

研究事項

ゾンメルシーに就て

(藤江)

リックサツクの研究

(討論、説明佐々木)

平地滑走に就いての考察

(岡村)

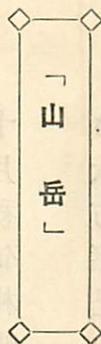
尙七八月は歸省者多き爲休會とす

◇ 編輯後記 ◇

本誌は比較的氣持よい編輯を終りました。この後も
本誌の内容を益々充實させる様に讀者諸彦の御援助を
お願い致します。

時日の都合で藤江君の「五月の奥山盆地」の續きを
載せ得なかつたのは残念です。九月號には必ず掲載出
來ると思ひます。

前號の寫眞はやはり藤江君の撮つたものです。氏名
を落したのは編輯者の不注意ですからこゝでお詫ひし
ます。



第十七年第三號五月三十一日發行さる。

樽前火山彙の地形及植物景觀

(竹内 亮)

西澤紀行

(書上喜太郎)

錫ヶ岳

(黒田正夫)

雪の上の岳へ

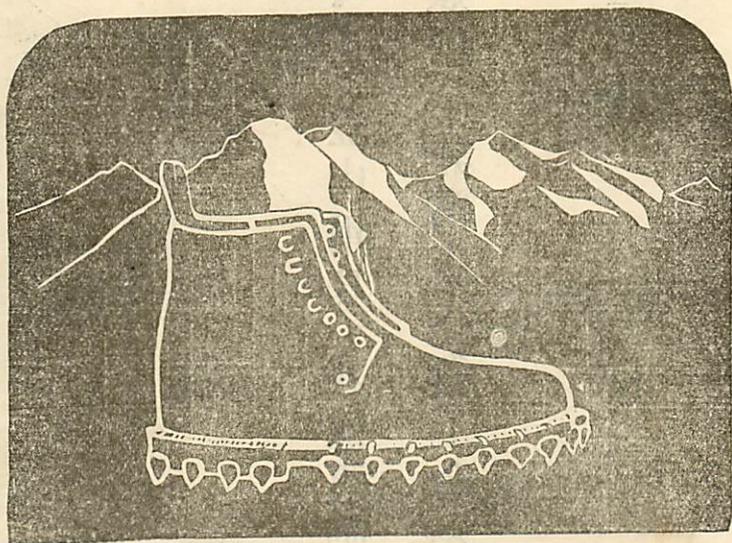
(榎谷徹藏)

内容はその他豊富であるが寧ろ雜録の方がよいものが多い

山岳スキー寫真展覽會

十月初旬札幌に於て開催の豫定につ
き大方諸兄の出品御援助を希望す。

札幌 山とスキーの會主催



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小石話電

番七二一六京東替振

スギー・登山用具・其他運動
具類は是非當店へ御下命を

小樽市穂穂町大通

梅屋運動具店

電話九八六番 振替小樽七〇番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo

No. 40. Augusto 1924. Sapporo. Japanujo.

MIMATSU MOUNTAINEERING OUTFIT

Patent Folding Camp Furnitures,
Folding Canvas Boats,
All Lines of Summer Sports Outfit.



美満津の

登山用具



東京本郷赤門前・電話 石川一園八四五・二〇七

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十三年七月三十日印刷
大正十三年八月一日發行

山とスキー 第四十號

定價金參拾錢

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です

◆スキーを研究せられ、登山に興味を持たるる方が一人でも多くお讀み下さることをお願いいたします

◆山及スキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願いします
又印譜の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること

◆記事中の數量は全て、C. G. S. 係によられん事を望みます

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金になるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せません。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十三年七月三十日印刷
大正十三年八月一日發行
(毎月一回一日發行)

編輯兼 佐々木 政 吉
印刷兼 佐々木 政 吉
發行者

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番